
親と子

そらまめ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

親と子

【Nコード】

N9796A

【作者名】

そらまめ

【あらすじ】

この親子？は果たして上手くやっていけるのでしょうか？特に子の方が扱いが難しそうです…。

深夜2時を過ぎたというのに阿笠邸の地下室からは無機質なパソコンのキーボードを叩く音が聞こえている。哀はコーヒーを傍らに置きパソコンの画面と睨み合いを続けていた。後ろでドアの開く音がした。

「哀君！そろそろ寝んと体に悪いぞ！」

「博士こそ早く寝たら？」

「それはそうじゃが哀君も早く寝ないと……」

「悪いわね……。この仕事だけは疎かにはできないの。博士も分かるでしょ？」

「だが最近毎日こんな状態じゃろう？ワシもその仕事がどれだけ重要なものか分かつとるが先ず自分の心配をせんと……」

「自分の心配……私はもうそんなことできないの。私がしてきたこと、言わなくても知ってるわよね？私は何としてでもこの薬を完成させなきゃならないの。例えこの身が果てることになってもね。」

「ワシは哀君がそんなに責任を負わんでもいいと思うがのう。もっと気楽に……」

「無理よ……。私の薬で大勢の人が死んだのは事実。こんな薬を作っておいて気楽になんてできるはずがないわ。博士に私の気持ちなんて分からないでしょうけど……」

「分かる分からの問題じゃなくてワシは哀君を心配して……！！」

「出てって……関係ない人は！」

「関係ない……？どうなっても知らんぞ！」

ドアの強く閉まる音がする。哀は少しその閉まったドアを眺めたがコーヒーを一口飲むと再びキーボードを叩き始めた。

次の日の朝博士は起きてリビングへ向かうと朝食にサランラップが

かぶせてあった。トーストとスクランブルエッグだった。スクランブルエッグは博士の好みの半熟仕立てになっている。昨夜

「関係ない人」

と言われたばかりで博士は複雑な気持ちで朝食を食べた。インターホンが鳴って博士がドアを開けるとコナンが立っていた。

「追跡眼鏡の電池が切れちまってよ。」

よく電池の切れる道具である。

「ん？博士元気ねえみたいだけど…。また夜更かしでもしたのか？」

「あ、ああ。」

「程々にしろよ？博士は歳なんだから。灰原はどうした？また地下室で研究か？」

「さあな…。ワシは関係ないようじゃし。」

「へ？何言ってんだ博士？夜更かしで頭の回転が悪くなってんじゃねえか？」

昨夜の事を知らないコナンは呑気なものである。コナンはついだに哀にも顔を出しに行くことにした。階段を降りるにつれあの無機質な音が聞こえてくる。

「よお灰原！相変わらず研究熱心だな。」

コナンの声に哀は手を止める。

「あなたの推理オタクぶりには負けるけどね。」

哀の嫌みにコナンはジト目になる。

「まあそれより博士元気なさそうだったぜ？博士、ちゃんと寝てんのか？」

「さあね…。知らないわ。」

「知らないって…薄情だな…。同居人なのによあ。」

「私は私の仕事で忙しいのよ。とても重要な仕事。なのに博士が…」

「……。」

「ん？博士がどうかしたのか……………つておいおい！？」

哀は言い負えると座ったまま静かに頭を椅子の背もたれに沈めていた。コナンは寝不足かと思ったがそれにしても呼吸が荒かった。

哀の前髪を持ち上げ額を触るとかなりの熱があることが分かった。
「すげえ熱じゃねえか！？ったく…無理し過ぎなんだよ…。」

コナンは言いながら哀を抱えると急ぎ足で一階へと登っていった。

「おい！博士！灰原すげえ熱があるぜ！とりあえずタオル冷やして
持ってきてくれよ！」

追跡眼鏡を充電器に繋いでいた博士ははっと目を開けて哀を見やると
急いでタオルを取りに行った。

「ふう…。後は安静にしてりや大丈夫だろ。」

コナンがそう言うのと博士は哀を見ながら糸を垂らした操り人形のよ
うに椅子に腰掛けた。

「ふう…無理しよってからに…あれほど注意したのに。」

コナンは少しほほ笑んだ。暖かなほほ笑みだった。

「博士…そろそろ帰るぜ。あとはよろしくな。」

「なんじゃ？もう帰るのか？」

「ああ…。だってよ、仲直りするには俺は邪魔だろ？」

コナンは全て見抜いていたようだ。博士が戸惑っているのを見てコ
ナンはまた少しほほ笑んだ。からかいのほほ笑みだった。

日は暮れて窓からは西日が入り込んできている。博士は椅子に腰掛
けたまま眠っていた…というのは嘘で珍しく目を見開いて起きてい
た。

「哀君…ワシは君がどんなに苦しい思いで薬を作っているのか想像
もつかんがワシが君と関係がないとは思いたくない…。君を引き取
ることになって最初は戸惑ったがワシは嬉しかったんじゃよ。まる
で娘ができたみたいで…。でも君にとってワシは関係のない人じゃ
ったのかのお…。」

博士が遠い目をしていると哀の重い瞼が持ち上がった。

「おお哀君！起きたか！いやゝ良かった良かった！昨日はスマンかったの。哀君の気持ちも分からずに。じゃがやっぱり少しは自分の心配を……………」

博士が言い終わる前に哀は博士の大きな体に腕を回した。

「お父さん…。関係ないわけ…。ないでしょ？」

博士の瞳から大粒の涙がこぼれ落ちた。自分がこの子と少しでも分かちあえた気がして嬉しくてたまらなかった。哀の瞳からも一筋の涙がこぼれていた。思えば数十年振りの親という安心感だった。

次の日の朝哀は学校へ行く準備を整え玄関で靴を履いていた。

「じゃ行つて来るわね。博士。」

「おや？もう父さんとは呼んでくれんのかの？」

「ば、馬鹿ね…あれは昨日限定よ。」

哀は頬を少し赤らめてそう言つと玄関のドアをくぐっていった。博士は少し残念だったがとても満ち足りた気分だった。外では博士と哀の気持ちを表すかのように紅葉が始まっていた。

おしまい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9796a/>

親と子

2010年12月26日21時44分発行